

手をふるお父さん

飯島 陽奈子

わたしのお父さんは一年以上前から仕事の都合で大分県に住んでいます。大分からわたしの家には一ヶ月とか二ヶ月に一度くらいに帰ってきます。お父さんが帰ってくると、妹は走ってげんかんにいって、だきつくけど、わたしはお父さんがいないことになってしまったし、お父さんがいると、テレビを見ているのにすぐけい馬などの番組にかえられてしまうから、別にもいなくてもいいや。と思ってしまいます。

夏休みに入ったので、お母さんと妹とわたしの三人で大分に行きました。最初にお父さんのアパートによりました。部屋の中を見つみると、わたしたちが父の日にあげた物や手紙、わたしと妹の写真、家を出る時にわたしたち小さなぬいぐるみまで全部かざってありました。成田に住んでいる時のお父さんは写真や絵を見るだけでおわるので、わたしはともうれしくなりました。

お父さんは二日間のあいだにわたしたちをテーマパークやサファリパークなどのいろいろな場所につれて行ってくれました。初めて温泉にも入り、とても楽しかったです。

わたしたちが帰る時、駅のかいさつでわたしたちが見えな

くなるまでお父さんは手をふってくれました。駅のホームで電車を待っている時もホームの下の駐車場から、お父さんはいつまでもいつまでもこちらに手をふってくれていました。わたしはその時、急に悲しくなりました。お父さんが家に来て大分に帰る時には、悲しいなんて思うことはありませんでした。でも、自分が帰る時には、お父さん、また一人になっちゃうんだな。さびしくないのかな。本当はもっと一しよにいたかったんじゃないのかな。いろいろとお父さんのことをかんがえて、なみだもあふれてきました。

大分旅行がとても楽しかったこと、ごはんを食べたりゲームを買ってもらったりすることすべてお父さんがさびしいのをこらえてわたしたち家族のためにがんばって仕事をしてくれているから、ということに気がきました。わたしはお父さんに「ありがとう」を言いたくなりました。なにかお礼もしたくなりました。お父さんが心配しないように、病気をしないで元気に楽しくすごそうと思います。習い事や勉強も努力しようと思います。ちょっとはずかしいけど、ありがとうと言ってみようと思います。